良い国に基いで、軍力ではなく御神慮に従って造林と決意した。

妻の母と、私の母二人に戦いの話をすると泣きながら、貞彦も立派だ、南満の吉林省より更に安全な所に大多数は逃げたのに、貞彦は、団員と家族を思い、北進し、ソ連兵に捕らえられ黒河からシベリヤで労役と少栄養でも体を鍛えていたので丈夫で帰国出来たのだと言ってくれました。私の生まれた三瀬の加藤重朗左ェ門様よりよし杉苗作りをするには山五十川より三瀬にこい、苗畑に向く土地を与えるからと言われ、妻の妹と結婚し現在の住所に移住、杉切り山を冬も雪をのけのけ得意の開墾鍬で開墾したが、苦労話でなく、楽しみ話です。約二ヘクタールの苗畑を現在は長男夫婦で頑張り、私は山林経営で頑張っています。

哀しいことは太田団長と、団に残った団員多くが、太田団長とともに殉農報国したことを後日、阿城県から引揚げた方々から聴いて悲憤やるかたなく、ただただ拓友先輩同志の冥福を祈った。

開拓義勇軍の最後

北海道　沢田　貞

私は昭和十八年開拓団補充団員として、渡満しました。入植一年後、本部勤務となり農産加工の作業をすることになり、本部に残りました。

昭和二十年一月、家族招致で北海道へ帰り結婚、三月再び妻を連れて渡満しました。その頃は団員は入営や応召で、ほとんどおりませんでした。

八月には団幹部は全部応召、団員も、二十歳の者は私の外、男子三人、五十歳以上の男三人の七人、女子は、幹部婦人五人、団員妻三十五人ほどと団員の母四人ほど、小人、男女合わせて、四十六人、計九十七人ほどでした。敗戦後現地復員者、幹部二人、団員十三人、うち二人は復員途中戦死しました。

昭和二十年八月十三日、県公署で各団幹部集合、私も出席、作戦会議が行われたがソ連参戦は知らされなかっ

た。各団は分散している部落を、本部に急いで集合するよう、そして警備をしっかりするようとの達しでした。

私達は老若合せて七人の男で第一部落、第二部落、第三部落、水田部落と本部部落をどう守れば良いか、本当に無茶な話でした。

小銃は男女皆に渡すだけの数はあり、弾丸も四千発ほどありましたが、また本部落には、酒石酸を採るため、日夜通しで現地人が働いており、大変危険な状況の毎日でした。

十五日正午、敗戦の報らせが入った、皆を集めて報国、今後のことなどを話合うも、まとまらず帰宅した。

チャムス方面では銃砲音も聞こえなくなり、不気味な夜だった。夜、警務課から私達の隣りの三江省通化県で暴動が起きて、日本人に相当の被害が出たようで警戒を厳重にするよう達しが来た、七人ではどうすることも出来ない。

十六日朝全員集合重要書類、団旗、勅語等を広場国旗掲揚台下で焼却する。そして私は皆に、食糧等は来春まではある、小銃、弾薬も四千発はあるがいつまでもつかわからない、いつどこででも自決をしようと話をする、皆大声で泣くだけ、私は各家に石油を一缶づつくばり、全員自決後私が火を付けるからと、そして皆の後始末を見届けて私もあとを追いますと、そういっているときに弁事所に行かれていた団長婦人一家と、弁事所勤務者が戻り自決は見合せ隣の長野県開拓団へ集結しようということになる。

皆を馬車で先に出発させ、本部落を一巡ニワトリ、豚などを戸外に出して、現地人部落民と別れ皆の後を追い、夕方皆の所へ、燃料、衣服、食糧もなく食糧運搬に行った者の中で団員の父と、団員の妻が暴徒と会い二人死亡、また冬の山へ夏着で荷車で薪木を切りに、女も、子供まで出かけたり、栄養失調で老人、小人が次々と死んで行く野菜など全然食べることはない、医者も薬もない、二十一年春、四月、五、六人、または十人ぐらいづつ現地人部落へ分散を命じられ、現地人の農作業に従事し、八月五日現地を引揚げ十月十六日、広島、大竹港に上陸、その間、大人六人、小人三十二人ほどが死亡、私の娘も大竹港に上陸したが亡くなりました。

私は今老妻と二人で五町八反の耕作をしています。

集団自決で生き残った七人の小学生

北海道　岩崎スミ

故郷に広い田畑を残したまま、北海道農法を指導する実験農家として、昭和十五年の春一家七人が渡満し、第四次哈達河開拓団の実験場に入植しました。

土地は、肥沃でありましたが、電気もなく駅にも、学校にも、病院にも、三里も離れ、狼の出没する所でした。マッチ箱のような小さな家、きたない水、雨振れば泥濘と化す道路、あまりの生活の激変でしたが、黙して耐え心を一つにして頑張りました。

渡満を待っていたかのように、学校から訓導として迎えられ、小学一年生から、寄宿生活する子供達と、寝食を共にしながら、若い情熱のありったけをそそいで、深夜まで教材研究に没頭いたしました。油のはいった皿に布の芯を入れて灯火とするので、鼻の穴は真黒になりました。おおぜいの生徒をあづかり、教壇に立つだけの教師では、間に合いません。今大阪府に引揚げていられる高田成章先生が校長で、先生は、スパルタ教育でありました。鉄は熱いうちに打て、というご方針で親元から離れて学ぶ幼い子達を、愛の権化で教育なさいました。寝小便の子を夜中に起してまわるのも校長、しっこ布団の洗い方を私に指導したのも校長、家庭でのご両親の役目を、全部こなさなければなりません。まったくゆるみない緊張した毎日でした。熱血の教育者であった校長に私は深く感動いたしました。

また新潟ご出身の吉田末吉先生は、毎朝ご自分のしぼった牛乳を寄宿舎生に飲ませ、舎監と教師をみごとに果たし、早朝から深夜まで「一切合切の苦労なことは僕にさせて下さい」とゆうふうに、生徒のために東奔西走なさいました。この吉田先生、高田校長のような先生が今の日本にいらっしゃるでしょうか。私は素晴らしい先生の下で勤めさせて頂きました。骨身を惜しまず、ひたすら教育の仕事に邁進していましたのに、昭和二十年八月九日ソ連の侵攻と同時に一瞬のうちに国境は戦場と化